劔と蛇

―続・茅の輪行事の起源と意義―

大森志郎

一　劍は蛇である

垂仁天皇の后、沙本毘売（さほびめ）が、その兄、沙本毘古にそそのかされて、八塩折の紐小刀をふりあげてはみたが、思ひためらひ、自分の膝を枕に寝てゐる夫の顔に、はらはらと涙をこぼす。目をさました天皇が、錦色の小蛇が頸にまつはりついた夢を見た、と話をする。それで「争はえじ」と覚悟して、兄の叛逆を告白する。――この話は、古事記に紐小刀とあるのを日本書紀では匕首と記してあるが、話の内容は全く同じで、天皇の夢に見えた錦の小蛇は、后がふりあげた紐小刀そのものの姿に外ならない。しかし、日本書紀で明らかなやうに、紐と蛇とが対応するのではなくて、刀劍が蛇の姿をもつているのである。蛇は刀の形象である。上代の人たちにとつては、それは比喩でもなければ形容でもなかつた。

播磨風土記の讃容郡引船山の条にかういふ話が見えてゐる。天智天皇の御代に丸部（わにべ）臣といふ人が河内の国兎寸（とき）村の人のもつてゐた劍を買ひとつたところが、その家が滅びてしまつた。そののち、苫編部（とまのあみべ）犬猪といふ人が、その廃墟をたがやして、土の中からこの劍を見つけた。「土と相去ること廻一尺ばかり、その柄朽ち失せしかども、その刃渋びずして、光、明鏡のごとくなりき。」不思議に思つて家に持つてかへつて、鍛人（かぬち）に打たせるために、その刃を焼いたところが、「この劍屈申して蛇（をろち）のごとくなりしかば」鍛人は驚いて、作業をやめて、朝廷に献つた。今、この里の御宅（みやけ）にある。――この風土記の編集されたころ、讃容郡中川里のみやけに蔵められてゐる劍は、劍にして蛇であると信ぜられてゐたことがわかる。

もう一つ例をあげよう。さきの話と同じく垂仁天皇の代、八十八年のこととして日本書紀に載つてゐる。

天の日槍の持つて来た宝物は但馬にあるので、天皇が見たいと思はれて、日槍の曽孫、清彦に言ひつけられた。清彦はその宝物を捧げてまかり出たが、その中の出石といふ名の小刀は匿して自分で佩びてゐた。隠匿したことは知られなかつたが、賜宴の席でその刀が天皇の目にふれて、何の刀子だと訊かれたので、清彦は、匿しおふせないとさとつて、献つた神宝の類であると白状した。神宝なら離してはいけないだらう、といつて、みな一緒に神府に蔵められた。ところが、ある日、宝府を開いてみると、その小刀が失せてゐる。使をもつて、お前のたてまつつた刀が見えなくなつた。もしやお前のところに至つてやしないかと清彦に問ふたら、「昨夕、刀子、自然に臣が家に至り、乃ち、明旦失せぬ」と返答した。そこで天皇はかしこまつて、それ以上追求することをやめた。「是のち、出石刀子、自然に淡路島に至れり。その島人、神なりと謂ひて、刀子のために祠を立つ。これ今に祠る所なり。」とある。神剣は、自由に動いてみづから欲する所に移つてゆくのである。ここには蛇といふ文字はあらはれてゐないが、さきの二つの話と対比して、上代の人人が、剣にいかなる生命力を認めてゐたかは、判断するに難くはあるまい。

中世のいはゆる日本刀、外反りになつた片刃の刀にも、不動明王のもつてゐるやうな両刃の剣にも、刀身に竜蛇の彫刻をしたものが少くない。その図柄は倶梨迦羅文とよばれてゐるとほり、不動尊の三昧耶形にもとづくことは明らかであるが、かういふ好尚はインド的なものの影響だけによつて成り立つたのではなく、日本古来の刀剣信仰の上に外来のものが定着したと考へるべきであらう。剣はもともと蛇であると信ぜられてゐたから、倶梨迦羅文はたやすく受入れられたのである。

二　八岐の大蛇

神話の八岐の大蛇については、中世以来さまざまの解釈が試みられて来、解釈史が書きうるほどである。しかし、従来の説には、これを何らかの比喩としてアナロジカルに解釈しようといふ傾向が強かつた。立場が違へば解釈も違

つて来る。神話は生活に密着してゐると認めるわれわれは、これが何かの比喩であるとは考へることができない。八岐の大蛇の説話の骨子が鞍馬の竹伐り型であることは、八岐の大蛇の神話が行事の裏づけをもつてゐたことを意味する。八岐の大蛇の話は、単なるオハナシではなく、生産に即応した民俗行事と伴つてゐたことを示唆する。

記紀の文献に即して考へてゆかう。

八岐の大蛇の話は、こののちの神話の展開に関してゐる点から見れば宝剣出現談である。現に祀られてある天の叢雲の剣の出現を語るものである。この宝剣の出現は、この説話の結末であるといふよりは、この説話のもつてゐる意義である。宝剣があるからその由来が語りつがれるのであるが、同時に、説話が宝剣の神聖さを保証してゐることでもある。これは、神話を機能から解釈する現代の神話学の動かない立場である。

天の叢雲の剣は大蛇の尾から現れた。ところが、剣そのものが蛇でもあるのだから、蛇から剣が出現するといふことは、何の不思議もないわけである。天の叢雲の剣は八岐の大蛇の分身にほかならない。蛇を斬つて剣を得たといふことは、神話の社会的な機能から見ると、大蛇の性能は不滅であることを意味する。蛇は斬つても蛇性は滅びないのである。蛇は司水の霊であるから、人間が水の力を制御するためには、蛇を斬ることと、これを活かすことが伴つてゐなければならない。鞍馬の竹伐り行事において、雄蛇は斬りはふられ、雌蛇は祭られるのはそのためである。八岐の大蛇からは天の叢雲の剣を得た。神話の系譜においては、この出現の形はオヤ・コであると認められてゐる。その点、竹伐りの夫婦であるのとは異つてゐるが、司水の霊の活殺を意味することは、同じである。

天の叢雲の剣といふ名も、日本書紀の註となつてゐる一書に、「けだし、大蛇の居る上に常に雲気あり、故れ以て名づくるか」と、八岐の大蛇の方にかけて解いてゐるのは、いはば歴史意識の過剰であつて、剣そのものが、常に雲気を帯びてゐたと解釈する方が素直であらう。剣そのものが直接に雲気に連つて、司水の性能を帯びてゐると見るのである。

神話の大きな構造のなかで八岐の大蛇の説話のもつてゐる意味は、大蛇の斬られるとともに天の叢雲の剣の出現した

ことを語ることにあり、司水の神の死と生とを示すものである。このことは日本の神話の基本的な構造として、すこぶる重要なことがらであると考へる。

三　天の羽羽斬

八岐の大蛇の神話には、も一つの剣がまつはつてゐる。大蛇を斬つた十握の剣である。剣が蛇であるなら、剣で剣が斬れるか、といふやうな戯論は、とりあふ必要がない。われわれは上代人の思考をそのままに追究しようと志してゐるのであつて、それが客観的に成り立つか否かを検してゐるのではない。いな、上代人の思考をそのままに再思考することこそ歴史的な客観性を確立することなのであつて、それを現代人の世界観によつて合理化することは、主観的な歪曲を加へることに外ならない。歪曲した視角からは、歪曲した映像きり得られない。上代人には上代人の世界観があつた。それを虚心に追つてゆかなければ、思想と生活との歴史を明らかにすることはできないのである。

八岐の大蛇を斬つたのは十握の剣と記してあるが、ツカは、ひとツカミ、すなわち指四本のはばを単位とする上代の尺度であるから、十握の剣といふのは、剣の長いことを示した美称であつて、その剣の個有名詞ではない。

古語拾遺には、天の十握の剣に注して、

その名は天の羽羽斬。今、石上神宮に在り。古語に、大蛇を羽羽といふ。言ふこころは蛇を斬るなり。

とある。八岐の大蛇を斬つた剣は、天の羽羽斬といふ名を得て、石上神宮に祀つてある、といふのである。

ハ行P音説によれば、ハハの古音は papa であつた。pの濁音はbであるから、ハブといふ名の蛇は、このハハといふ古語の系譜を伝へてゐるものであらう。

羽羽斬といふ剣があるとともに、羽羽矢といふ名の矢もある。天若日子が、高天原から中つ国のことむけに遣はされた時に、天の麻迦古弓と天の波波矢（記）を賜つた、といふのがそれである。書紀には天鹿児弓・天羽羽矢と記してある。羽羽斬が大蛇を斬つた刀なら、羽羽矢は蛇を射る矢であるはずである。「古語に大蛇を羽羽といふ」とある

古語拾遺の注を知つてをりながら、天の羽羽矢の方には、羽が空中を切つて飛ぶ矢である、といふやうな注解が踏襲され、辞書さへそのやうな説明でこの語を収めてゐるのは、奇怪である。羽が空を切らなければ矢は飛ばない。子どもの玩具ならいさ知らず、羽のついてゐない矢といふものは、ないであらう。雨の降る日は天気が悪い、といふような言ひかへは知識ではない。ハハは大蛇である、ハハ矢は大蛇を射とめる矢である、と率直に解釈することを避ける理由は、ないはずである。現に、蛇的を射る行事が毎年行はれてゐる地方が、今日も残つてゐる。蛇を斬つたり、射たりすることは、古典の神話がこれを語り、今日の行事がこれを伝へてゐるほど、重大な民俗儀礼であつた。そのことを認めれば、天の羽羽矢が、天の羽羽斬に対応する、蛇を射る呪力をもつた矢であることに疑はないはずである。

日本書紀には、一書に、

その蛇を断りし剣は、なづけて虵の麁正（をろち あらまさ）といふ。こは今、石上宮に在す。

とある。八岐の大蛇を斬つた剣、天の羽羽斬、またの名、虵の麁正は祀られて石上神宮に在る、といふのである。

四　石上神宮の祭神

日本書紀に「今、石上宮に在す」と記し、古語拾遺に「石上神宮に在す」とある、その宮と神宮とが同じ所在を示してゐることに、異論はあるまい。問題は「在石上」といふその記載法である。これは、

故、その伊邪那岐の大神は淡海の多賀に坐す。（記）

乃ち、大穴持の命の申し給はく……己命の和魂を……大和の神奈備に坐せ、……阿遅須伎高孫根命の御魂を葛木の鴨の神奈備に坐せ、事代主命の御魂を宇奈提に坐せ、賀夜奈流美の命の御魂を飛鳥の神奈備に坐せ……（出雲国造神賀詞）

などある多くの例から、主神として鎮めまつた、と解釈すべきものであらう。天の羽羽斬の剣が石上神宮に祀られてゐる、といふことは、天の羽羽斬の剣を祀つたのが石上神宮である、といふ意味であつて、この剣を祀つて石上神宮

が成立したことを語つてゐる。日本書紀と古語拾遺との記載は、この外に解釈のしようはない。石上神宮が先にあつて、そこに献納したとか、副祀したとか、いふ意味ではないはずである。

二十二社註式が、

石上社者、素戔烏尊所持之十握剣也。一名、天羽々切、神体云々

と記してゐるのは、二十二社といふ観念が成立したのちの平安時代になつても、そのやうに伝へられてゐたことを示してゐる。

ところが、同じく二十二社を説いてゐる廿二社本縁には

両説あり。一には素戔烏尊の蛇の麁正……二には高皇産霊神、神武に授くる十種の瑞宝……

とあつて、二つの説をあげるが、斬蛇の剣の方を先にあげてゐる。

後の説の典拠になるのは、古事記の中巻、神武天皇の条に、熊野の高倉下が献つた横刀が、建御雷の神が「僕、降らずとも、専ら其の国平けし横刀あれば降してむ」と高倉下の倉の頂を穿つて堕し入れた刀であることを記した、その自注に、

この刀の名は佐士布都の神といふ、亦の名は布都の御魂、この刀は石上神宮に坐す。

とあることである。

建御雷の神は天の尾羽張の神の子で、天の尾羽張の神は、伊邪那岐の命が迦具土の神を斬つた佩刀そのものであるから、剣の神である。建御雷の神が出雲に降つて、十握剣を抜いて浪の穂に逆さまに刺し立てて、その剣の前に趺み居て交渉したといふのも、建御名方の神と力競べたとき、立氷にとりなして建御名方の神が逃げ出したといふのも、剣の神であるからである。そして、天の尾羽張の神が天の安河の水を逆さまに塞きあげて道を塞いで、河上の天の石屋に坐すといふのは、この剣の神が水深い淵に棲む竜蛇の神でもあることを示唆してゐる。その子建御雷の神が浪の穂に十握の剣をたててその上に趺み居たといふのも、同じく竜蛇の性を帯びてゐることを示してゐる。

建御雷の神の平国の剣といふのは、この浪の穂に逆しまに立てた十握の剣にほかならない。竜蛇の性を帯びた剣の神であることは、須佐之男のみことの天の羽羽斬と同じである。

石上神宮の祭神について二つの伝へが起ったのは、この二つの伝承が類似した性質を帯びてゐるからであらう。

五　斬蛇の剣と平国の剣

しかし、八岐の大蛇を斬つた天の羽羽斬は出雲系の剣神であり、神武天皇の昏睡をさました布都の御魂は高天原系の剣神である。斬蛇の剣は民俗に連り、平国の剣は政治に連つてゐる。石上神宮は出雲系の神社か大和系の神社かといふ根元的な問題にもなつて来る。わたくしは、大和地方には、はやく出雲系の文化があつて、のちに筑紫系の政治が及んで大和朝廷が樹てられたものであると考へてゐるが、大和の国に所在する神社が、神武天皇の剣を祭るとする説と須佐の男の命の剣を祭るといふ説との二つの伝へをもつとき、大和朝廷に連なる説が次第に有力になつて来ることは、自然であつて、石上神宮も平国の剣を祭るとする説が公式化して来る。それで、延喜式の神名帳には、

石上坐布留御魂神社 名神大、月次、相嘗、新嘗

と記されて、布留の御魂は布都の御魂である、と説かれるのが一般となつて来た。

そして、石上神宮は、布都の御魂を祀り、後に八岐の大蛇を斬つた十剣の握をも合祀したのである（加藤咄堂、日本風俗志）といふやうな記述さへ見られるやうになつた。これは現代人に受入れられやすい貌を呈するが、おそらくは机上で作りあげた紙上の妥協説で、後に合祀したといふのは何を典拠にして言ふのか、明らかではない。

もつとも、日本書記には、

素戔嗚の尊の蛇を斬りたまへる剣は、今、吉備の神部の許にあり

と記してある一書があり、備前国赤坂郡石上神部の別社、石成（いはなし）神社がそれであるといふ。ただし、古事記伝には、「備前石上布都之魂神社の伝説には、神剣は昔大和の石上へ遷し奉りて此には坐まさずと云り」とある。神名帳に、

石上布都之魂神社

とあるから、この備前の神社の名は平国の剣に即してゐる。

斬蛇の剣を祀つて布都之魂神社といふのであるなら、天の羽羽斬と布都の御魂とは同じものであるはず、と言つてしまへば問題は割り切れるが、古典の伝承を尊重するかぎり、さういふ武断な説を樹てるのは躊躇せねばならない。

石上神宮に奉仕した石上氏は、物部氏の主流である。物部氏は、神武天皇の大和入りを強く拒んだ登美毘古に奉ぜられた饒速日命の裔であり、大和の土着勢力である。石上神宮の創建は崇神天皇の代と伝へてゐる。それらについても論ずべきことは多いが、岐路に入ることを避ける。石上の祭神は斬蛇の剣であるといふ古語拾遺や二十二社註式の伝承は重く見るべきものと思はれる。これらの伝承は、平安時代に入つてから記録されたもので、しかも日本書紀と合つてゐて、後の転訛とは認めがたいばかりではなく、石上神宮の行事に、それを裏づけるものがあるのである。

六　茅の輪を斬る神剣

近世の世俗の常識をうかがふために「和漢三才図会」をみると、袖中抄に拠つたのであらうが、

相伝ふ、昔、布留の川上より一つの剣、流れ来る。触るる所の石木、皆切破せらる。然るに、布洗ふ女ありて、剣、布に纏つて留まる。取り収めて祭る所なり。所以に布留の明神と号す。毎六月晦日の祭礼に剣を鳥居の外に出だし奉る。

と記してゐる。布に纏はりついて留まつたから布留といふのだ、とあるのは、漢字に即してできた伝説であつて、一種の通俗語源説にすぎまいが、この剣の神が河と縁、浅からぬことを語つてゐる。それは祭日の六月晦日が大祓の日であり、いはゆる名越の祓が河辺で行はれる日であることを注目すれば明らかである。そして、河上から流れ来て纏はりついたといふのには竜蛇神のおもかげを伝へ、触るるところの石木みな切り破られるといふのには蛇斬りの行事を連想させるものがあることを注意しよう。和州旧跡幽考には、

祭は当代六月晦日、かの浣布にとどまりし剣とて袋にをさめて鳥居の外まで出し奉り、云々

とあるが、石上神宮に奉仕した現存の知人に聴いたところでは、神剣を抜き身のまま捧げて、布留の川辺に赴き、祓殿で茅の輪をくぐつて本殿に還るのが、この神事の中核であつて、神縄の神事と称してゐるとの事である。

茅の輪が蛇の形象であり、茅の輪行事が、蛇斬りの模擬であるからには、石上神宮のこの特殊神事は、天の羽羽斬の名のとほり、年ごとに羽羽斬の行事を行つて来たことである。斬蛇の神剣が「石上に在す」といふ古典の記載は、単に石上神宮に納められてゐるとか、奉安されているとかいふことではなく、斬蛇の機能を生かしつづけてゐるといふ意味であつた。八岐の大蛇を斬つた刀は、今なほ、石上において年ごとに大蛇を斬つてゐるのである。大蛇を斬るのは過去に一度だけあつた事ではなかつた。神剣は裸身のまま茅の輪をくぐつて、年ごとに、大蛇を斬つてゐる。このやうにして、神話は現実に、それを奉する人人の生活行事と連つてゐたのである。

かういふ行事が、後代になつて、演劇的に組立てられたものであらうと疑ふ人があるならば、それは、民族宗教の古代的な意義と実相とを理解し得ないものと言はざるをえない。

石上神宮の茅の輪行事は、八岐の大蛇を斬ることの模擬である。茅の輪をくぐることは、蛇を斬ることである。茅の輪をくぐる時に折かへして三度くぐるといふ行法は、蛇を三段に切つて棄てるといふ伝承と対応するものである。神剣を鋒を立てたままに持つて茅の輪をくぐるのは、石上神宮のほかには聞くところがないやうである。しかし、全国に行はれてゐる茅の輪くぐりの行事がすべて、この意義を失つてはゐないことは、明らかである。

東京の山王日吉神社の夏越祓は六月十五日に行はれてゐるが、神主をはじめ、行事に加はる人たちは、茅の輪をくぐりながら、輪の茅がやを抜いてゆく。くぐり終つた時には、手のとどく限りの茅がやはむしり取られて、輪の骨がむきだしになつてしまふ。抜いた茅がやを持つて帰るところは、安乗の注連切りを連想させるが、祭場の施設を傷つける行事である点を注目すべきである。

RÉSUMÉ

Sword and Serpent

by

Shiro Ohmori

This study follows my article "Reed-ring Ceremony in Japn" ("Essays and Studies" IX, I.).

In ancient Japan, sword was generally considered to take the shape of a serpent. The myth that the "Sacred Sword" was drawn out from the tail of a gigantic serpent called Yamata-no-Orochi seems to be explicable from this point of view. The sword which was used to kill the serpent became the subject of worship in the *Iso-No-Kami Shrine*. A sacred rite has been performed annually. When a Shinto-priest passed through a reed-ring (chinowa) with an unsheathed sword in hand. This rite is a symbolice experssion of killing serpent, and this proves that the origin of the reed-ring ceremony can be found in the mythology of Japan.